



さよなら、「総合問題」

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. やっぱりあった、「総合問題」

これまでに、たくさん定期試験を見てきた。そして、この夏の研修でも、何十という定期試験を見た。そして思ったことは、「やっぱり定期試験はほとんど変わってないなあ」ということだ。

その思いを強くしたのは、いわゆる「総合問題」である。まだ、これほど「総合問題」は存在していたのか。従来でも、ほとんどの高等学校の定期試験には、この「総合問題」が含まれていたが、これが中学校の定期試験にもかなり侵食してきているような気がする。正確に言うと、中学校では、これまで、3年生になると「総合問題」が出現し始めていたが、この「総合問題」の出現時期が早まってきたような気がするのだ。

これは、学習指導要領の改訂で、技能をバランスよく「総合的に」教えるようになったために、これまで以上に、教科書におけるリーディング・パッセージが早い学習段階から明確に位置づけられるようになったことと関係があるように思う。平成23年に出た国立教育政策研究所の『評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料(中学校 外国語)』によれば、「読むこと」の評価は、「教科書とは異なる物語を読むペーパーテスト」(国立教育政策研究所教育課程研究センター, 2011; 39)によるとあり、ペーパーテストは「既習」のリーディング・パッセージによらず、「未習」のリーディング・パッセージによるべきとなっている。しかしながら、実際は既習のリーディング・パッセージが定期試験に出題されている。そのために、「読むこと」の評価を装いながらも、「読むこと」を問うことはできなくなっている。授業中にリーディング・パッセージを読んでしまっ

ているために、テストで内容理解を問うことは馬鹿馬鹿しく、リーディング・パッセージ中にある文法事項や単語をあれこれ尋ねることになるのである。

世界的に見ても、きわめて珍しいテスト・タイプである「総合問題」。日本でも、大学入試センター試験にも英検のテストにもTOEFLやTOEICにも「総合問題」は存在していない。それでも、この「総合問題」は日本の定期試験からはなくなるらないのだ。

2. やっぱりやめよう、「総合問題」

「教えたとおりにテストして何が悪いのか、高校入試や大学入試、模擬試験でも(?)総合問題は出ているではないか。」こうした反論はこれまでもずいぶん聞いてきた。それでも、「総合問題」はやっぱりダメだと思う。

これまで、何度も雑誌原稿や著書に書いたり、講演でもその問題点を指摘したりしてきたが、「総合問題」はなくなるらない。私だけでなく、静哲人氏も、その著書や学会発表、講演の中で、「総合問題」の問題点を指摘している。

静氏や私の批判をまとめるとおおよそ次のようになるだろう。1つは、「総合問題」には、様々なテスト・タイプが含まれているために、テスト・ポイントが不明確であること。これは、とりわけ「指導」と「評価」の一体性が強く求められる「定期試験」においては、問題である。何を測っているかわからないようなテストでは、その結果から、「指導」や「学習」へのフィードバックを得ることはできないのである。

もう1つの問題点は、この問題の解答プロセスが、現実の言語コミュニケーションとはまったく異なる点である。「総合問題」のように、空所やら下線が引

かれた文章を見て、単語やら文法やら発音やらについてばらばらに処理しなければならないということは、現実のコミュニケーションでは決してない。現実の言語コミュニケーションでは、リーディング・パッセージはその内容をとるために読むものであり、これについて何か書くにしても、その内容についてまとまった文章を書くだけである。

こうした問題は、学習への悪しき波及効果をもたらす。というのは、「総合問題」の出題を想定した学習では、まとまったリーディング・パッセージの内容を理解しようとするよりは、その中にある単語・文法項目・発音などをばらばらに確認しようとすることになるからである。私たち英語教師は、このような英語学習を生徒たちに望んでいるだろうか。

さらに、現在の観点別評価では、この「総合問題」の結果は、行き場がないという点も問題である。「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」「言語や文化についての知識・理解」のどこに、この「ごった煮問題」の結果は行くのだろうか。多くの場合は、「総合問題」はリーディング・パッセージを載せているために、「外国語理解の能力」として扱われているようだ。しかし、皮肉なことに、「総合問題」には、思いの外、「外国語理解の能力」を問う問題は少ない。なぜなら、既習のリーディング・パッセージの内容理解を問うことの馬鹿馬鹿しさを誰もがわかっているからだ。

既習のリーディング・パッセージを出しても読めない生徒がいると言うのであれば、それは授業で理解させることができなかつたか、授業では理解させられたことを生徒が忘れてしまったかである。授業の内容を覚えているかどうかを見るのであれば、それは記憶力のテストとなってしまうだろう。

一部の入試や模擬試験で総合問題が出題されているというのは、残念ながら事実だろうが、それらは悪しきモデルである。なぜ、よきモデルに目を向けようとしないのであるか。繰り返すが、大学入試センター試験にも英検にも TOEFL や TOEIC にも「総合問題」は存在していない。

3. さよなら、「総合問題」

まるでゾンビのように生き延びてきている「総合問題」だ。そう簡単にはなくならないのかもしれない。しかし、言語テスト研究者としては、このような問題点を指摘し続けなければならないのは、悲しすぎる。

おそらく英語のテストを作るとなると、組み込まれた遺伝子情報に従うかのように、「総合問題」を作ってしまう英語教師が山のようにいるということかもしれない。何の能力を測るのか、また、その能力をどう測るのかを考える前に、「総合問題」を作ってしまったている。こうした状況にあって、「総合問題」をやめるということは、想像がつかないのかもしれない。

では、「総合問題」をやめるには、どうしたらいいのか。それは簡単なことである。まず、測ろうとする能力が何なのかを考える。もちろん、定期試験では、授業でつけさせようとしていた能力が測るべき能力である。それが確認できたら、次にその能力をどう測るのがよいかを考える。これが決まれば、あとはその能力を測る問題で、大問を構成すればよいだけのことである。

こうして作ってみれば、拍子抜けするほど、簡単に「総合問題」と決別できることがわかるだろう。そして、こうしてできあがった定期試験は、見た目にもすっきりし、大問ごとにテストング・ポイントが明確になっていることに気がつくであろう。測る能力が明確になっていれば、観点別評価での結果の行き先も、誰の目にも明らかになるに違いない。さよなら、「総合問題」。

【参考文献】

- 国立教育政策研究所教育課程研究センター(2011).『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(中学校 外国語)』Retrieved from http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/chuu/10_chu_gaikokugo.pdf
- 静哲人(2002).『英語テスト作成の達人マニュアル』大修館書店.
- 若林俊輔・根岸雅史(1993).『無責任なテストが「落ちこぼれ」を作る—正しい問題作成への英語授業学的アプローチ』大修館書店.